



国際自然保護連合（IUCN）は2025年1月、

全世界の淡水生物のうち4分の1が絶滅の危機にあるとする報告をNature誌に発表しました。2万3千種以上にのぼる淡水魚類、トンボ類、甲殻類などの生息状況を世界で初めて地球規模で網羅的に評価した結果です。当論文の著者の1人として研究チームに加わった立場から研究論文の内容を紹介いたします。

淡水域は、人びとの生活や経済発展に欠かせない資源ですが、淡水生物の絶滅

### 人の目に触れないまま喪われる生き物たち

淡水域に棲む魚類、トンボ類、甲殻類について詳細な生息・保全状況の調査が世界で初めて実施しました。その結果、評価対象とした世界の淡水生物種2万3496種のうち4分の1に近い約24%が絶滅の危険性が高いことが判明したのです。特にエビ・カニ類などの節足動物は全体の30%と最も深刻度が高く、淡水魚は26%、トンボ類は16%でした。日本国内でも淡水魚類約400種のうち42%（169種）が絶滅危惧種とされています。

要因として、気候変動（地球温暖化）や異常気象による水位低下、農業・工業目的の過剰な取水、無秩序な漁業や観賞魚販売を目的とする乱獲、ダム開発、汚染、外来種による捕食や競争などが明らかになりました。人間活動による過剰な水利用に温暖化が加わり、川を流れる水が減少し、結果水温上昇に拍車がかかります。愛知県内では農地が大規模な物流倉庫に置き換えられ、絶滅危惧の魚種が次々に姿を消している地域もあります。

地球上にある水の大部分は海にあり、淡水は3・5%と少ないですが、大部分は地下水や水河であり、淡水生物が直接利用できる水

世界的に見ると、沼地や湿地、池は森林消失の3倍の速さで減っています。しかし、私たちはそれに気づきにくいいため、淡水生態系は人の目に触れないまま失われつつあります。そのため、淡水生物に関する情報は、陸上生物のそれに比べてきわめて少ないのもまた事実です。それは水の中の世界が人間にとって見えにくく、調査が不十分であることも原因の一つです。一方で、陸域と水域の生態系は互いに密接に補いあう関係にあります。淡水生態系がないがしろにされれば、陸域も負の影響を受けてしまいます。地球上にあるすべての自然が生態系サービス（人間が享受する自然の恵みのこと）の原動力であり、種の減少や喪失を防ぐことは、私たち人間の生活を守ることもつながるのです。

# 地球上の淡水生物

## 4分の1が絶滅危機

リスクの包括的な評価はこれまで行われてきませんでした。私たちは、川の上流域から下流域、湖沼などの



名城大学人間学部教授  
谷口 義則

たにぐち・よしのり 専門は生態学（淡水域）。北海道大学大学院・博士（地球環境科学）修了。

は川や湖、池、湿地にあり、全体の0・01%と非常に少ないのです。ところが世界に分布する約3万6千種の魚類のおよそ半数が淡水魚であり、この小さな空間にひしめき合っています。つまり淡水域は生物多様性の宝庫ですが、陸域にあるがゆえに人間活動によるダメージを受けやすい場所です。

研究の結果、世界の淡水生物が絶滅危機に陥っている

